

# 光といのち

第112号  
2018年5月15日発行

発行所  
真宗大谷派勝善寺  
〒299-2214

千葉県南房総市二部1344  
電話 0470-57-2657  
FAX 0470-57-2290

Eメールino-teyy@khaki.plala.or.jp  
URLhttp://syozenji.or.jp/  
住職 釋孝昌(井上孝昌)

親鸞聖人は、  
地獄は自分の  
住处だと見定  
めておられる。

水島見一

## 親鸞おじさんに

### 会いに行くんだ！

私の学生時代が終わった頃に、フランス人形みたいな顔をした体の大きなフランス人が来ておられました。その方はジャクリンさんといいます。当時私ほどの年代でしたが、最近は全然顔を見ておりません。

その方は、フランスの図書館で華道の本を見て大乘仏教の精神を知りました。そこで「大乘仏教を知るには何がいいのか」と図書館でたずねたら、フランス語に翻訳されたボロボロの『歎異抄』を渡されたそうです。それでジャクリンさんは『歎異抄』を読まれました。

これは松原先生からお聞きした話ですが、『歎異抄』第二章に

「地獄は一定すみかぞかし」(テキスト『歎異抄 白日抄』五頁)とあります。これは、なかなか驚くべき言葉です。われわれは地獄が嫌ですが、親鸞聖人は「地獄は一定」と地獄は自分の住处であると言っておられます。そして「とても地獄は一定すみかぞかし、弥陀の本願まことにおわしまさば」と続きます。

キリスト教は天国と地獄を教えます。地獄を脱して天国へ行くのです。ところが親鸞聖人は、地獄は自分の住处と見定めておられる。そこにジャクリンさんは驚かれたのです。

それで「親鸞おじさんに会いに行く」と、飛行機で来たらしいのですが、お金がなかったののでシベリア鉄道で日本まで来られたということです。

## 第5回水島見一先生聞法会

日時 6月10日(日)～11日(月)  
場所 勝善寺本堂 南房総市二部1344  
日程

1日目【10日(日)】  
14:30～14:55 受付  
15:00～15:20 開会(真宗宗歌・勤行・挨拶)  
15:20～17:00 休憩を入れて法話  
17:00～ 諸連絡  
2日目【11日(月)】  
09:30～09:55 受付  
10:00～11:45 休憩を入れて法話  
11:45～ 閉会(諸連絡・恩徳讃)



テキスト 『歎異抄 白日抄』(直道学舎)  
1,000円でお分けします。  
参加申込 準備の都合がありますので、2～3日前までにお知らせください。  
参加費 御懇志をいただければ幸甚です。この会を運営する資金とします。

このように念仏者が生まれるということがあるのです。それほど『歎異抄』は人々に感化を与えている書物です。

これは、二月の水島見一先生のご話の一節です。

ちなみにジャクリンさんは、京都駅から東本願寺にやってきて、受付で「しんらんさん居ますか？」と尋ねたそうです。そして、そこで初めて親鸞聖人が鎌倉時代の人だとわかったのです。その後、真宗大谷派の僧侶と結婚されたということです。

『歎異抄』に感化された著名な方として、哲学者西田幾多郎、三木清、戦時下に生きた作家大岡昇平、司馬遼太郎がいます。

特攻隊員でこの書を携えていた方も多いと聞いています。また、宗派を超えて、多くの宗教家にも読まれているということです。

ともあれ『歎異抄』は、「自己とは何ぞや」と自身を深く見つめる必要に迫られた方には、必読書なのです。

左記の聞法会では、その心に触れるお話しがあります。

※写真上はペチュニア・マツリカ、下は君子蘭です。  
川名喜昭さんが持参し玄関を飾ってくださいました。

「遇うべき真理に遇う」。  
これが人生の指標です。

水島見一先生

下の文章は、水島先生の師である松原祐善先生が、長休寺（福井市）でなさったご法話を直道学舎の方々が文章化したものです。

長休寺は、松原先生のお嬢様が嫁いだ寺です。

文中に「ちよつと胃腸を痛めたのだと思いますが、食欲がもうなくなりました」とあります。

実は、このとき松原先生は胃がんであります。（それから半年も経たないうちに亡くなられます。）そういう状態で松原先生は、ご法話のために長休寺に向かったのだ、奥様が「どうなるやらわからん」とお嬢様に電話しているのです。

水島見一先生は、前回の聞法会で下記の文章をお読みになりながら、「なぜ仏法を聴聞しなければならぬのか」と、私たちにお話してくださいました。

左ページは、そのご法話を、聞き取り文章化したものです。

「老」ということはおめでたいのですが、老人になりますと、そこには必ず「病」というものがくっついていくのです。老病です。

私の病気は「頸椎狭<sup>けいついきょうさくしやう</sup>窄<sup>せう</sup>症<sup>しやう</sup>」といって、首の頸椎が狭く、そこが神経を圧迫して両手が痺れるわけです。痛いのです。医者は痛み止めを色々工夫してくれまされども、そういうものを余計にやるとまたかえって良くないというように、痛さを堪えていくほかないわけです。そんなことでレントゲンの所見によりますと、私の病気は永久に治らない、不治のものだそうです。

同時に、これは手術をして治そうとすれば治るけれども「あなたの歳では」と言われました。事実八十四歳ですから、それは手術しても効くやら効かないやらなのです。それならばただけしないほうが良からうということ、この病をお受けしていかなければならぬわけなのです。

そういうことで、実はちよつと胃腸を痛めたのだと思いますが、食欲がもうなくなりました。お医者さんは私と中学の同窓なものですから、私のことを非常に気にしまして、すぐに私の寺へやって来て点滴を五日間続けて打ってくれたのです。なるほど、それで元気が取り戻されたのです。そして今日の会話をお知らせを受けていたので、何とかこれは出てお話を申し上げたいと思っていたのですが、「どうなるやらわからん」というように私の家内が娘に電話しておりました。

しかし、せっかく皆さんがお忙しいのを抑えてご遠路に聞わずお集まりくださるのです。そうい

縁というのは非常に得がたいものです。私にしてもそれは得がたいわけです。ですから何とか出席してお会いしたいなと願っておりました。実は今日まで寝ておりました、せっかくですから散髪屋に行きまして、頭をひとつ綺麗にして出直して参りましたわけです。

八十四歳というと、御開山様（親鸞聖人）のお手紙や、あるいは蓮如様の最後の『御文』がだいたい八十四歳の頃のもので、そして、やはり七月に病気になっておられるのです。法然上人は「病<sup>びやうげん</sup>患<sup>わづらひ</sup>をえて、ひとえにこれをたのしむ」と、「病氣を得て楽しい」とおっしゃいます。また蓮如様は『御文』の中で「法然<sup>ほうねんしやうにん</sup>上人のように楽しいとは言えない、法然上人のようにはいかないけれど、病患を得て往生が近づくということが喜びだ」とおっしゃっておられるのです。

では「往生が近い」ということを、私が喜べるかという・・・。

私は、この世に出て、遇わなければならない本當の真理というものに出遇ったという、この喜びです。「遇うべきものに遇うたぞ」ということです。「病患を得て楽しむ」ということにもならないし、往生が近いと喜ぶということも言えません、この世に出てきて遇うべき真理に出遇った、真実に触れさせてもらった、「ああ、良かったなあ！いつ死んでも」と喜びを持っているのです。

『樹心』第十四号 平成二年七月二十二日録音分より。  
※『樹心』は松原祐善先生の法話録です。

## なぜ仏法を聴聞するのか？

このことが今までは、ぐずぐずとしていて、何かハッキリしませんでした。

けれども改めてこの文章を読みまして「ああ、これだ」とハッキリしました。

「遇うべき真理に遇う」。

これが人生の指標です。

例えば夫婦円満だとか親子仲良しということも、それはそれとして大事なことであります。

あるいは健康ということも。

私は今一日一万歩歩いていきます。ほぼ毎日かかさずに歩きましたので、体重も大分落ちてきて体が軽いなと感じています。変な病気もないしと、今は思っています。それはそれでいいのです。

しかし、毎日一万歩歩いてても死ぬ縁が来れば死ぬのです。寂しいですが。名残惜しいですが・・・。

また我々は、死ぬときには身に付いてくるものは何もありません。

お金を貯めても、身に付かないでしょう。いくら服を買って

も死に装束を着せられて、それも燃えてしまいます。お金がたくさんあっても何にもなりません。

我々は裸一貫で生まれてきて、最期も裸一貫で死んでいきます。

名誉も地位も何にも、なりません。

私はこう見えても、一応は学位をとったのです。文学博士という学位をとりました。その際に大きな賞状をもらいました。

桐の箱に入っていました。「これもらった」と奥さんに持つて帰ったのです。昨日か一昨日でしたか、フツとそれを思い出し奥さんに聞いたら、「どこいったかな」と言っていました。こんなもんです。

その賞状は学長室で仰々しくもらいました。賞状には大谷大学と書いてあり第何号とも書いてありました。

「おばあちゃんの筆筒の中に入れたかも」と奥さんはその後言っていました・・・。

もう奥さん、全然関心が無いのです。私もそのようなこと、けるつと忘れていきます。

何が言いたいのかと言えば、

何も身に付いてくるものはないということですよ。

私は、大谷大学を辞めます。

辞めたら、地位や名誉は何にもありません。

昨日大学へ行ったら職員に、「まとの履歴書を出してくれ」と言われました。書いたのは「平成三十年三月三十一日 退職」

だけです。「どうぞ」と出しました。色々な経歴がずつと書いてありました。職員の方が打ってくれたのです。私が書いたのは最後に「退職」だけです。これで、何にもありません。

人生というのは、こういうもんです。そうになったら、「何で生きていくんだらう」ということです。

「永遠の真理」に遇わなければ、我々の人生は空しいのです。それに目を覚ませということですよ。

しかし我々は、空しくならないうようにならないようにと生きています。が、本質は空しいのです。また、その空しさに我々は気がつかないのです。我々は、上手いこと誤魔化してしまうのです。

私の家の団地でも老人の方々が集まって、オアシスという会をやっています。会費は100円で、コーヒーを飲んで皆さんとお喋りするとうような会です。

椅子に座ったままの体操や、健康のお話しを先生を招いて聞いています。そのようなものを聞いても一緒です。死ぬ時がきたら、縁が尽きたら、「さよなら」です。我々は業縁存在ですから。

健康に留意しても、死ぬ時がきたら死にます。タバコを吸って、お酒を飲んで、がちがちの生活をして九十歳、百歳まで生きなければならぬ人もいます。これも大変だと思いません。

我々は、縁が尽きれば、「さよなら」をしなければならぬ。縁があれば死にたくても生きて地獄のような生活をしなければならぬ。これを業縁存在と言います。

この業縁存在を如来というのです。この如来からいただいた人生しか、われわれは生きられないということですよ。

この如来、「永遠の真理」に遇わなければ、人生は空しい。

# 3月21日 春彼岸会

なぜ、法事をするのか。  
いざ施主になると大変です。僧侶や親戚・料理屋などと日取りを調整し、誰を招き、やれお供えは引き物はと悩まされます。「仏法に出会う大切な場」と僧侶は語ります。しかしそれは日常的な感覚だけで生きている人には絶対にわかりません。聞法してのみ、領けることです。



# 4月8日 花まつり



腕輪数珠を作り、甘茶かけをして、紙芝居を観、西山社中の方々のお点前をいただきました。

## 千葉組合同研修会

四月三日(火)に館山夕日海岸昇鶴で、「寺が本来の役割を回復するには」と講義をいただき、その後別に分かれ語り合いました。当寺からは、門徒会員の田村晋一氏・大胡登美子氏・足達崇氏と、推進員の関口昌司氏・鈴木正一郎氏が参加されました。

## 遊子の会の来寺

四月九日(月)15人の方々が訪れました。代表の湯川敬之ご夫妻が前日にお見えになり、「仏教の話を一時間ほどしてください」と。寺は仏法聴聞の場であることを心得た方と敬服し快諾しました。

## 千葉組親鸞教室

四月二十六日(木)にありました。同朋会の方々に受付をお手伝いいただきました。海先生言わく「お経は、私たちが人生を生きるためにある」と。

## 行事予定

月曜日朝勤め 6時15分〜45分

※「正信偈」などを同朋唱和し、御文「拜読後に法話があります。」

6月3日9時〜八日講十日講

6月3日14時〜同朋の会

6月6日13時〜東京教区同朋大会

6月10日11日 水島先生聞法会

6月15日 婦人研修会

6月22日 親鸞教室

6月24日8時30分〜奉仕作業

6月28日 千葉組同朋総会

7月22日14時〜 同朋の会

8月10日10時〜 孟蘭盆会

9月23日10時〜 秋彼岸会

10月1日 親鸞教室

10月7日14時〜 同朋の会

10月未定 水島先生聞法会

10月21日13時30分〜世話人総会

11月12日14時30分〜 仏具磨き

11月16日 準備13時30分〜

報恩講11月16日17日

・速夜16日15時〜

・晨朝17日6時30分〜

・日中17日10時〜

※・以外は当寺が会場です。